

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

## 「ちょっとした工夫」

昨年度、授業中によく離席をしていたSさん。3年生に進級した今年は、担任の先生の「ちょっとした工夫」で、大きく変わりました。

### 1 昨年度の様子

- ・授業中の離席が多く、いつも支援員の先生のサポートが必要だった。
- ・Sさんの指導内容・方法の参考資料にするために検査を実施したところ、知的発達水準は平均レベルであるが、ワーキングメモリに弱さがあることが分かり、苦手な教科を中心に取り出し指導を行った。

### 2 今年度のちょっとした工夫

#### (1) Sさんの願いを叶える 子どもの「ありたい・なりたい」を引き出す！

Sさんの座席を支援員の先生がサポートしやすい廊下側の前列や一番後ろの席、あるいは窓側の一番後ろの席にしていたが、担任の先生に見てほしい気持ちが強く、真ん中の前列に憧れていたSさんの希望を叶えた。

→子どもはうれしいとき、困ったとき、自分を見守ってくれる先生の視線を期待して必ず振り返る。前列でSさんの姿を見て、感じて、言葉を掛けたり、視線や表情等の非言語的なメッセージを送ったりしたことで安心感につながった。

#### (2) Sさんの気になる行動を整理する ストライクゾーンを少しだけ広くする！

授業を妨害する、許可を得ずに離席するなどの行動以外は、『優しい知らんぷり』をして、当たり前に行っていることに注目してほめる回数を増やした。

→子どもは評価されたように育つので、注意を受けることが多くなると、「私はダメなんだ」と自己肯定感が低くなる。自己肯定感が低くなると、活動への意欲がなくなり、注意を引くために問題行動を起こすことがある。小さな努力を見付けて、温かい言葉を笑顔で言い続ける。

#### (3) Sさんのワーキングメモリの弱さに配慮した授業づくり 子どもの数だけ支援がある！

活動に見通しをもてるように授業の流れを視覚化したり、教科によって授業の流れをパターン化したりした、集中力を持続できるように授業を短いユニット（15分前後）に分けた、大切な指示（教科書のページ等）は文字で示した、記憶を補うツールとして「九九表、計算手順表、分かりやすいワークシート、複数のヒントカード」を活用した。

→ワーキングメモリはあらゆる学習活動（読書、作文、計算、推論、会話等）を支える重要な力である。しかし、記憶の容量は、どの学年でも5歳前後の個人差が存在する。

Sさんには「ないと困る」支援は、学級のみならずにも「あると便利な」支援となる。

担任の先生のちょっとした工夫で、Sさんが自分がしていること（例：授業中の離席）について、それでよいのか気付けるようになり、行動に大きな変化をもたらしました。



とれたて直送便



「歯でガードしているんです」→「は？」

知能検査の中には、制限時間内に鉛筆を使い、なるべく速く間違わずに作業をする課題があります。ある小学生の子どもが、注意を集中させてその課題に取り組みました。終わった途端、白い前歯を出したので、「どうして歯を出しているの？」と尋ねました。すると「今、私はドキドキしているの。だから心臓が口から飛び出さないように歯でガードします」という答えが返ってきました。そのユニークな表現に、検査を忘れて思わず笑ってしまいました。「みなさんは心臓がドキドキしたら、どうやってガードしますか？」

